

飼主の死生観と亡きペットの存在感

——「家族同様」の対象を亡くすとは

新島典子

第一節 問題関心

本稿では、喪失体験のつらさについてのこれまでの議論を踏まえ、ペットをなくした元飼主（以下、元飼主）⁽¹⁾が「家族同様」といわれるペットの喪失をめぐって経験した、亡きペットの存在感に着目する。そして、それが飼主の死生観にどのように影響しているのか、周囲の他者がつらさを理解するための一助として、社会学的知見である相互作用論的な観点から捉えなおしてゆきたい。相互作用「過程」という時系列の中に、ペット喪失のつらさが発生し、強化されるダイナミズムを見ようとする本稿の試みによって、家族同様といわれながら

も、時に人間とは異なり、人間と対等な存在ではなくなるペットと飼主との関係性の理解を深めることが可能になる。なお、こうした試みを通じて最終的に筆者が目指しているのは、決して対等とは限らない人間同士の関係性の十全な理解である。

(二) 本稿の位置づけ

喪失体験者がつらいとき、周囲の者には何が出来るだろうか。ペットに限らず、大切な対象をなくした人々の抱えるつらさは、周囲の他者には理解が難しい。喪失対象との生前の関係を理解できても、つらさが理解出来るとは限らないからだ。周囲の他者がつらさを理解できない場合には、コミュニケーションが難しくなり、喪失体験とは無関係な局面で関係性がこじれることもある。そもそも、生前の関係性にしても、つらさにしても、当人にとって少なからず主観的な事柄を周囲の者が理解すること自体簡単なことではない。ことに喪失対象がペットとなると、人間と対等には見られにくい対象であるだけに、理解が難しくなることも多い。

しかし、だからといって喪失体験者のつらさの理解や、周囲の他者との協同行えないのは問題だ。このような理解や協同を可能にするためには、どのような要件が必要なのだろうか。これまで筆者は、こうした問題意識を持ち、家族やペットを亡くした遺族の人々にインタビュー調査を行ってきた。そして、生者、つまり遺された者の死生観には死者、つまり喪失対象の存在感が大きく多様な影響を及ぼしている可能性について、また、周囲の他者が遺族をケアする際には、既存の枠組にとらわれず、各遺族の死生観の独自性を認識する必要などについて検討してきた(新島「二〇〇一、二〇〇四a、二〇〇四b」)。まずは、これまでの論考から得

られた知見を概観し、本論での課題を提示したい。

(二) つらさを強化する周囲の無理解

まず、本稿でも取り上げるペットロスとは、ペット喪失（ペットを死別・生別によってなくすこと）から生じる喪失感情である。最愛のペットを失った元飼主のペットロスのつらさが、喪失自体よりも周囲との関係で強化されることについて、新島（二〇〇一）では本稿でも依拠する相互作用論的立場から、バーガー&ルックマンによるリアリティ構成論、ポルナーによるリアリティ分離・封殺の概念⁽³⁾を使って論じた。

これまでの獣医学、臨床心理学等関連諸領域の先行研究では、ペットロスは元飼主のペットへの愛着から生じると説明されてきた。周囲の無理解から生じるという説明もあるが、そこでいわれていた無理解とはペットを哀悼する文化への無理解のことであった。しかし、喪失体験者本人につらさを生じさせる周囲の無理解とは、むしろ、どんな状況ですでにあるつらさが強められてしまうのかといった、つらさを強化するプロセス自体についての周囲の無理解なのである。

新島（二〇〇一）では、このような立場からつらさを捉え直した。複雑な相互作用プロセスで、周囲からの無理解ゆえにつらさがいかに強化されるかについて、ペット喪失体験者への聞き取り調査の事例から分析した。そして、ペットロスがひどくなるのは、ペットについて元飼主本人と周囲との間に生じているリアリティ分離や、そこにおける周囲の無理解によるリアリティ封殺のためであることを説明した。

リアリティ分離が起こるのは、無論ペット喪失体験時に限らず、物事一般に対して各人が付与するリアリテ

イにも同様に生じる。ところが、ペット喪失の場合にリアリティ分離や封殺が高い頻度で生じやすいのは、ペットを表現する際の「家族」という隠喩の多用ゆえとも思われた。また、含意のずれに気がつきにくいだけに、時間の経過とともに、自分の哀悼の仕方が周囲の他者からの承認を受けにくくなることも、ペットロス特有のつらさといえる。例えば、ある人の場合は、「亡くなったのは仕方なかった」という論理が、別の人の場合は「代わりの犬を飼えば元気になる」といった論理が、「元飼主の論理とは別に周囲の他者によって容易に働く点だと思われる。このようにリアリティ分離が生じやすい点で、「ペット喪失」は非常につらい「喪失体験」事例であることが提示された。

(二) つらさを強化する代替不可能性についての周囲の無理解

ところで、このように喪失体験のつらさを強化している要素は何であろうか。喪失体験からの回復には、自らの内心での回復だけでなく、周囲の他者との相互作用過程で行われる回復もある。ところが、後者では、喪失対象がかけがえのないものであるという「代替不可能性」について他者の理解が得られぬ場合、他者によってつらさが強められてしまう場合がある。これまでの喪失体験からの回復研究では、他者による回復支援の意味や、回復の困難を逆に強化されてしまう可能性については、十分に議論されてきてはいなかった。

そこで、新島(二〇〇四a)では、既存の喪失体験からの回復研究を、回復は周囲の他者の支援も得て社会的に行われるべきだという立場に立つ「社会化モデル」と、回復は私的なものでもあり、個人で行うべきであるという立場からの「個人化モデル」に分け、まずは先行研究の整理を行った。次に、「社会化モデル」を、

これまで展開されてきた「精神分析的・心理学的回復過程」や「物語論による自己の再構成過程」ではなく、喪失感情などの喪失のつらさを喪失体験者と共有できるかどうかという、「共有の可否」に留意した他者とのやりとりの中での回復過程と捉えた。さらに、「社会化モデル」の有効性を高めるためには、どのような要件が必要とされるかを事例から検討した。

そして、そのような要件の精査にむけ、「社会化モデル」では前提とされているものの、同モデルの有効性を揺るがしかねない喪失対象の「代替不可能性」について検討した。「代替不可能性」という概念は、喪失体験者にとって喪失対象がかけがえのないものだった場合に、喪失対象の代替として他の誰か、あるいは他の何かといった新しい対象をあてがわれることでは、喪失体験から回復することは出来ないということを意味する。検討の結果、他の対象で代替が可能かどうかという点で、喪失体験者と周囲の他者との間には認識のずれが生じやすかった。また励ましのつもりでの他者の言葉が、喪失体験者にとってはつらさを助長することも多いということが提示された。

(四) 死者の存在感の死後の影響力

なお、人間の家族を亡くした事例に限っても、いろいろなケースがある。家族が亡くなったとき、臓器提供を承諾する遺族もあれば、承諾を躊躇する遺族もある。少なからぬ遺族の中では死者は引き続き「生きています」ように感じられていることから、このような違いは、家族の死についての認識が各人でずれているためのように思われる。

このずれを検討するため、新島(二〇〇四b)では遺族への聞き取り事例を素材に、死別体験をした遺族が元気になるまでの回復過程に焦点をおき、死に関するリアリテイの感じ方の個人差について事例を分析した。

まず、死者の存在感が遺族の死生観にどのように影響しているのかについて検討した。事例からは、死者が死後もなお、生前より強く遺族に影響を及ぼし、遺族の行動がそれに影響される場合があることが提示された。

次に、回復過程において、死のリアリテイの感じ方が複数の意味でずれていることを明示した。亡くなった家族が本当に死んでしまったのだ、という死のリアリテイを受け入れるタイミングは、死別体験を経験した人同士の間でもずれることがある。ところが、同じ経験者同士だと、相手に自分のつらさを理解してもらえないのではないかと期待したり、自分も経験者だから相手の気持ちがあわかっていないに違いないという過信をしがちである。死のリアリテイの感じ方がずれている場合には、そのような期待や過信があることで、逆に回復過程にある遺族のつらさが強められてしまう場合のあることも分析の末、示された。

これらの考察の結果、このような死別体験者に接する際に他者のとるべき姿勢について、以下が考えられた。まず、医療専門職を主体とするケア論がその限界を乗り越えるためにはケアをあくまでも「相互」行為過程として捉え返す必要がある。しかし、ケアとは医療従事者によって行われるものだけに限らない。このため、日常生活における広義のケアを考えなおし、相手に関心をもち、観察するといういわば広義のケアを通じて、遺族の「回復」が促されるべきと考えられた。

(五) これまでの知見と本稿の課題

これまで扱ってきた諸事例では、遺族のつらさはそれぞれ多様でありながら、周囲の他者によるケアは理解不足のため十全ではない状況にあった。そうした中で、ペットを亡くした元飼主の場合には、自分にとつてのペットの存在感を真摯に再考し、言語化することで周囲の他者につらさへの理解を求めたり、独自の死生観を構築することで、周囲の他者とのコミュニケーション不全を乗り越えようとする人が多かった。そうした努力を強いられる人が多いのは、いまや室内飼育が多数派で「家族」と認識されるペットが多いとはいえず、ペットの死が人間の死とは取り扱いの異なる部分もあるため、周囲の他者とのリアリティ分離が生じやすいためと思われる。

そこで、今回は、「家族同様」といわれるペットを亡くした飼主の事例を取り上げた。元飼主が自分の中で亡きペットの存在をどのようにとらえ、葛藤を感じる場合にはどのような折り合いをつけているのか、調査を行い、分析した。分析の素材には、元飼主を対象にこれまで筆者が実施してきた各年代の男女延べ一〇〇名超へのインタビュー結果を用いた。元飼主はその中で、ペットの死がなぜどのようにつらいのかについて言及している。そのつらさにペット事例独自のものがあるならば、それは家族同様といわれながら、対等ではない存在ともされる点で人間とは異なる、ペット独自の存在感やそうしたペットに対する独自の死生観に起因するものと考えられる。

そこで、ペットと人間との取り扱いの違いにも着目しながら、元飼主の死生観に影響を及ぼしているように見受けられる亡きペットの存在感、死生観を明らかにするべく、「家族同様」の対象を亡くした事例の分析を

試みた。

(六) 調査方法

調査の対象者は、無作為に依頼した二都三県のペット霊園からの紹介者と、その方たちからの紹介者である。一九九九年から現在まで、スノーボールサンプリングによる二〇代から七〇代までのペットをなくした元飼主の男女延べ一〇四名にお会いし、属性を簡単に伺った後、各人には自由にお話しただいた。調査は一人ずつ実施し、一人あたり三〇分から一時間の予定が、それ以上になるケースが大半であった。対面調査の内容（食事時間など、インタビュー前後の時間はのぞく）は録音し、文字に起こした。電話での聞き取り調査では、録音が出来ないため、メモ書きで記録をとった。

第二節 事例検討

(一) ペットへの「愛情」とつらさ

ペットの死を意識して、飼主はなぜどのようにつらかったのか。つらさに関連する語りに着目すると、飼主としての肯定的な自己評価や理想像にぶつかる。以下、これを飼主の「愛情」と呼ぶことにする。これに関連して、喪失対象が人間ではなく動物であることによる一定の特性が、以下の語りには散見されるように思われる。なお、以下の引用箇所のうち、カッコ内は筆者による注釈である。

事例1…飼主の過失を正当化する「愛情」(二〇代女性)

これは、飼っていた犬が体調を崩したのに気がつくのが遅れ、結果的に犬をなくしてしまった飼主Aが、自分を責めている事例である。

ペットショップによく見に行ってたんですね。それで、子犬がだんだん大きくなってきていて、うちの子は、なかなか出て(売れて)行かないで、いつもいるんですね。ほかの小さな子犬がどんどん入ってくるし、肩身の狭い思いをしているんじゃないかなあ、なんて、(いつも決まって見ていた犬のことが)かわいそうになってきたんです。それで、家族に相談して、思い切ってうちで買わないと、ということ。(略)だから、まあ、なんというか、私たちが助けてあげたのよっていうところはあるから。かってもらえただけ幸せなんだから、って。

まず、その犬を選んで店から連れ出したこと自体が犬を幸せにした飼主という肯定的な自己評価に直結している。

だけど、気がつかなくて(症状を)こじらせてしまっていたって聞いたときには、なんてひどいことをしちゃったんだろう、ひどすぎる、って泣きましたよ、ショックで。(略)でも、どうして病気にしてし

まったんだらう、っていうことはもちろん反省するんですけど、でも、反省しながらも、こんなに動揺してるわけだし、それって可愛がってるからだよね、と。(略)うちの家族で助けてあげた、ほかの子犬じゃなく、うちのX(犬)を選んであげたんだ。それで、あんなに心配して、すぐ獣医さんにも連れて行ったりした。これほどまでに自分はやっぱりかわいがっていたじゃないかって。うちの犬のことを結局とっでも思ってたじゃないかって思って、なんかこう、そう思うとハイになる感じがしたんです。結構やるとやってるんじゃない、立派じゃないって。

犬の健康を維持できなかった「ひどすぎる」飼主としての自分を「動揺して」否定することで、逆にそれほどまでに「立派」な「愛情」深い飼主という自分にいっぱ酔っているかのようである。

さらに、売れ残りかけていたところを買ってきて家族になったという、人間ではなくて犬ならではの「助けてあげた」という感覚、また、「すぐ獣医さんにも連れて行った」こと、これらが自分は飼主として果たすべきことを果たしている「愛情」ある飼主という自己への肯定評価を助長していることがわかる。

事例2: 「愛情」を維持するつらさ(二〇代女性)

以下の事例では、飼犬が体調を崩し、病院につれていったところ、高額な医療費がかかることがわかり、元飼主Bは大変つらかったという。

治療費の額を聞いて、なんとも言えず、涙が出ました。なんだか悲しいというか、むなしい感じだったかな……こうして泣いている自分はそれこそ愛情の深い飼主だけど、いつまでもこれを続けられるのかって。(略) いつまで治療費を払えるのかなって。ものすごく重荷でした。払え切れなかったら、死んじゃうのかなって。それってでも、耐えられない。だから、このままもし死んでしまったら、死んでくれたら、ほかの人からは、きっと、愛情深く、甲斐甲斐しく世話をして、ちゃんと最期を看取った、愛情深い飼主でいられるだろうって、実はね、思ったりしました。

いつまでこの状態が長引くのか先が見えず、通院で時間も余計にかかるため疲れも増すこのような状況下、Bさんは追い詰められていた様子であった。自分の生活にも支障が出て、いずれ治療代が払い切れなくなるときがくることもわかっている様子であり、対目的には、自分の無力さを痛感している。でも、自分の経済力の無さで治療が打ち切られそれが理由で死なれるのは耐えられない。したがって、自分のせいということにならないうちに死んでくれたら、対目的には、自分は愛情深い飼主のままであらうと、事態も収束するだろうという解釈をしたことがあると話している。

同様のことは、人間の家族の介護に関与する家族にも経験されているかもしれない。しかしながら、異なる点は以下の部分である。

(略) それで、病院で相談したら、安楽死もありますよ、といわれたんです。飼主に迷惑かけて生きて

続けるっていうのは、わんちゃんだつていやですよ、といったことを。飼主さんが決めてくださいって言われたんです。

ペットロスの問題は安楽死の問題であるとは、すでに一〇年以上前に欧米ではいわれていたことであつた。日本では、医療も含めてペット関連サービスが急激に発展したこの数年、ようやくこの問題が浮上してきている。安楽死させるかどうかは、人間の場合とはまったく異なり、飼主に最終決定権がある。飼主がさまざまな要件を勘案して獣医師と相談の上決めることが出来るのだ。ペットの安楽死は法的な問題にはならず、専門家である医師が最終判定を下すわけでもない。したがって、症状が悪くて回復の見込みがなく、生命維持の費用を賄いきれない場合には、獣医師が安楽死を勧めることも少なくない。

ところが、飼主側はこれで葛藤を抱え込むことになる。

治療し続けるのもやめるのも、私が決められるっていわれたんです。それってでもとっても困るじゃないですか。(略) だって、狭いマンションの中で飼ってきたから、それも、もしかしてかわいそうだったかもしれない。かわいそうな状態で、生きてたつていうことかもしれないですよ。それなら、治療をずっとしていくのも、もうなんか、痛々しいし、かわいそうなことつてなりますよね。やっぱり安楽死が(犬にとつても) いいのかな、楽にしてあげられるのかな、とか。もう十分楽しませてくれたからつて。ずっと苦しむくらいなら、天国に生かしてあげたらどうなんだろうつて。

飼主は、時間的にも経済的にも治療の続行が厳しい状況で、安楽死が犬にとって良いことだと解釈しようとしている。これまで生きてきた環境が、犬にとっては決して恵まれていなかったのだとすれば、そんな環境で生かすより、むしろ死なせてやってもいいのではないかと考えている。なお、「十分楽しませてくれた」というのは、犬の年齢が一〇歳を超えていることからきている発言であろう。⁴

(略)でも、ほんとはまだまだ長生きしてくれる方がいいに決まってるんですよ。ミックスだしね。これって本当は、お金がかかることに耐えられなくて、安楽死させたほうがいいと、自分を説得しているよ
うな気もして。これって言い訳なのかもしれないな、逃げようとしている、って(犬に)申し訳ないって、
ほんとに申し訳ないって、なんてひどいお母さん(自分のこと)だろうって、思いましたね。ほんとに、
なんかひどいですよね(涙)……

安楽死を肯定的に考えたのは、治療の中止を正当化するためであり、治療を続ける大儀さから逃げようとしていたからだという。そしてそのような自分の姿をみて、ひどい飼主だという自覚を持ち、自分を責めた様子が伺える。

事例1、2ではいずれも、元飼主は「よい」飼主であることや「愛情」ある飼主であり続けたいと強く思い、

そうあるために、ペットにとっては必ずしも妥当とは思えないことでも、妥当だと解釈しようとしていたことがわかる。

(二) 動かないペットとつらさ

事例3…「愛情」を維持できぬつらさ(三〇代女性)

目を閉じて、動かなくなっていました。しばらくすると、おもらししたんです。おもらししているか、筋肉の力が抜けたんだと思います。きつと死ぬまでは、我慢してたんでしょう。いじらしいな、と思いました。でも、きれいだった毛が、汗でじとじとしていたところに、粗相というか、(略)汚してしまつたので、においもするし、なんか、もうそれはこれまでの、おっとりとかわいかったZ(うさぎの名前)ではなかつたんです。今にも動き出しそうな、でも、もう動かないんです。あたたかくもないし。よごれた毛のかたまりみたいな、そうです、ウサギじゃなくて、死んでしまつたらもう別モノになつてしまつた感じで。そのうち、硬くなってきて、もう見るのがどうしようもなくなつてしまいました。そんな自分が何かよそよそしい感じはしました。よく考えたら、ひどい飼い主ですよ、ほんとに変わり身が早いというか。でも、なんか、もう動かないんだ、と思つたら、自分とは関係ないものに見えてきたくらいで。

このウサギの飼主は、ウサギの死後、動かなくなつたウサギが汚れてしまつたのを見てはや生前の自分の

知っているペットのウサギではなく、「別モノになってしまった」、「自分とは関係ないもの」と感じたという。それ以降、ウサギへの接し方も生前のそれとはかわり、そんな自分が「よそよそしい感じ」に思えたという。

うさぎのおしっこのおいは強烈なんです。もうだめ、と思って、たえきれなくなつて、ビニール袋に入れて結びました。三重に重ねて、においがもれないようにして、ケージも大きなゴミ袋に入れて、それから、手を石鹸で洗いました。ずっと一緒に寝たり、してたのに、もちろん何度もトイレは家の中でしたから、そういうにおいはしょっちゅうでしたけど、でもなんか、汚い感じがして、手を洗わずにはいられなかつた。そういうの自分でもいやでした。でも、もうZは、もとのZとは関係ない塊みたいな感じで、なんか怖かつたんです。玄関の靴のむこうの、一番離れたところにおきました。それで、上から新聞紙をかけて寝たんです。

人間の家族が亡くなった後には、生前の親しさの如何を問わず、動かないからといって簡単に「別モノ」と思うだろうか。少なくとも、動かなくなつたからといって、粗雑な扱いをすることはないのではないか。あるいは、筆者個人がこれまでは清めたあとの遺骸にしか対面したことがないので、そう思うのかもしれない。が、死後にこのように別モノになってしまったと感じるのは、人間ではレアケースのように思われる。この点に、人間に対する死生観とは異なつた独自の死生観の存在を見ることができると。さらに亡くなつたペットは元飼主に恐怖感さえ与える存在になりえてしまう。

Zと遊んだこととかを思い出して、ビニール袋なんかに入れたのは、ちょっとどうだったかなとちょっと後悔したんですけど、でも、出せなかった。動かなくなってしまうと私と二人だけ、って思うとちょっとわかったんです。しょうがなかった。背筋がぞつとしてたんです。このまま早く朝が来ないかと思ひながら、動いたらどうしようかとか。

怖かったり、ぞつとしたのは、動かなくなってしまったウサギが、自分と二人だけでそこに存在していることの恐怖からだという。ペットは、別モノどころか、恐怖感さえ与える存在になってしまっている。その結果、生前ともに遊んだペットのウサギを「ビニール袋なんかに入れ」という粗雑な扱ひもやむなし、という判断がされている。

(三) 死の正当化

事例4 「寿命」の効用

「天寿を全うするって、ことば、ありますよね。これは、いつまで生きてたらそう言えるんでしょうか？ 寿命って誰かが決められるものじゃないと思うんですよ。」とあと数ヶ月で二〇歳になるといふ猫をなくした六〇代男性は言う。「寿命って、めだたい命って書きますね。わたしらだって、何で死んでも寿命だって言われるわけですよ。寿命だって言えば収まるっていうところがありますけどね、そんなのは勝手な言い草ですよ。」

この男性は、一九九八年にこの猫と一緒に飼っていた当時一四歳になる犬を亡くした。獣医師から、ダニ取りの首輪（刺激の強い薬なので、処方されても気をつけた方がいいと後日飼主仲間から聞いたという）を、了承も得ずに犬の首にまかれた直後、犬の肝機能が弱って寝たきりになり、一週間後には亡くなってしまったのだという。そして、抗議の目で獣医師を見たときに、「寿命だったってことですよ」と言われたという。

寿命であれば、体に負担のある刺激の強い薬を使うことも許されるのだろうか、と男性は寿命という言葉に頼った獣医師の対応を非難する。

かたや、病院でペットが何歳かと年齢を聞かれたとき、まるで飼主の自分が責められているように思ったという別の元飼主（四十代女性）もいる。

まだうちにきて、半年もたたない頃、せきをするようになって、抗生剤をもらったんですけど、ひどくなってそれから寝込んだんです。このときには、最初、電話で、獣医さんに聞かれたとき、なんていえないんだらう、ってあわてました。年齢を聞かれて答えたら、あちらでちよつと間をおかれたような気がしましたし。まだ一歳にもなっていないのに、もう病気にしたのか、って言われたみたいで、情けないし、不安でした。普通に飼っていれば、寿命まで到達するものだと思っていたから、なんだか、飼主として失格って言われている気がして、心臓がドキドキしました。寿命などの知識を最近は、いろいろなことがわかりますし、そういう知識があると、頭でっかちというか、結構こわくなりますね。

ペットの種類ごとに大体の寿命が認識されるようになってきたことで、寿命に達しないうちに死なせてしまうと、飼主としての責務を果たせなかったと責められてしまうという。そして、寿命を過ぎた死は良いが、それ以前のものは悪、という死に対する認識をもっている。

また、寿命に振り回される飼主（五〇代男性）も少なからずいた。

自然に天寿をまっとうしても、寿命じゃなければ飼主のせいになるところがある。寿命まではなんとしなくても生かさないといけない、っていう感じで、いろんな機械とチューブでつなぐようになったのもそれじゃないですか？ 寿命に近かったら、もうちょっと考えるでしょうに。（略）まだまだ若ければ、きっとチューブにつながらないと、飼主として責任を果たせてないんじゃないかって思ってしまうんですよ。で、結局、高いお金払って苦しい毎日が始まる。でも、それじゃあ、天寿じゃないですよね。（略）それに、機械などは昔はなかったでしょう？ 機械ができて、たくさんの方が命を救われたかもしれない。でも、昔はお金もかからなかったんですよ。庭につないで飼っていて、あるとき具合が悪くなって、気がついたら重態で、みんなで看取ってっていうね。犬や猫はそれが本人たちも楽で自然ですよ。（略）最近はずらにペット用の医療機器とかいろいろあるようだけど、そういうのがなまじ出来るようになってしまうと、使わないとなんかひどい飼主みたいじゃないですか。そういうのを高くて使えなくて死んでしまっても、それは自分のせいではない、それこそ、寿命だって考えるのが筋でしょう。

ここでは医療の進歩が、かえって天寿の全うを妨げてしまっているのではないか、という指摘がなされている。ペットの場合には、先進医療を受けるよりも、自然のままで見送りがかったという元飼主も多かった。また、そこまでお金をかけないといけないと言われることで飼主がたらくなくなっている状況があるようだ。

第二節 分析

事例1では、それが動物であるから、というペットに対するモノ的な見方が散見された。これに対して、人間の事例を想定した場合、たとえば家族の健康管理が出来なかった自分を否定することで、家族に対する自分の愛情に酔えるだろうか。少なくともこの点については、家族の中で意見が割れる可能性も予想される点で、犬の事例とは異なりそうである。今後は、さらに踏み込んで人間の事例についても聞き取りを行い、比較したいと思う。

また、「(ペットシヨップから) 助けてあげた」という解釈がされていたが、人間の場合にはそもそも買って来たわけでもないのに、人間の家族をなくした場合には、喪失対象への愛情の解釈に際して、このようなロジックで同様に自己陶醉することはおそらく難しいと考えられる。この点、飼主としての「愛情」の解釈において、ペットの存在感の中でも人間と対等ではない側面、ペット独自のモノ・商品としての側面が顕在化しているということが出来るだろう。そしてそのようなペット独自の存在感が影響を及ぼしている「愛情」の解釈が、ペットの死のシヨックを正当化していることも、この事例においては明らかである。このように、死の正当化

や、死のショックを和らげる働きをしている点で、この事例においてはペットの存在感が飼主の死生観に影響を及ぼしているといえよう。

事例2では、安楽死を勧める獣医師の側に、人間である飼主の都合を優先すべきという前提がすでにあるためだろうか。苦しみながら生き続けるくらいなら、死んだほうが良いと死を肯定しさえしている。環境の改善は出来ないという飼主側の力不足が前提にあるが、力不足を解消することは考えられてはおらず、飼主の事情が優先されていることがわかる。この点に、ペットと飼主は、飼主から見ても対等な関係性にはないということが、はつきりと明示されている。

1、2いずれの事例でも、その後、ペットにとって必ずしも妥当ではなさそうなことを妥当と解釈しようとしたことに自分のエゴを感じ、後悔していた。とはいえ、人間の場合に、植物状態でも生きていてくれるというだけで救われる、だから臓器移植カードなんて持たないでほしいとか、だからチューブをはずさないでほしい、などと訴える家族がいることは対照的である。

また、ペットを大切に思うあまり、ペットの死後も遺骸や遺骨を離さない飼主がいることが取り上げられがちなかたわらで、3のような事例もあることが明らかになった。動かなくなったウサギは、敬意を払う対象としての死者ではなく、粗雑に扱わざるをえない別モノになってしまっているという点で、ここには、飼主とペットの関係性の非対称性が現れている。ペットの死後も「愛情」ある飼主であり続けることは、このように難しい場合もあることがわかる。

また、事例4のように、先進医療を受けるよりも自然のままで見送りたいという飼主もいれば、日に何万円

でも払って最新の医療を受けさせ、テントの中で息を引き取る日が一日でも先になることが幸せだと思ふ飼主もいる。「寿命」という言葉で治療中止を正当化できる点が、「家族同様」ではありながら、人間とは異なるペットの特性といえるだろう。

こうした事例を勘案すれば、「ペットは家族」という語りにおける「家族」という言葉は、多義的で幅広い意味を含んでいることがわかる。ペットの存在感は、あるときは家族以上の大事な存在だが、何かが起こったときにはこのように振れ幅が大きくて、簡単に別のモノになりえてしまうようである。

亡きペットの存在感について、真摯に再考し、言語化することでペットの死に折り合いをつけようとする元飼主たちの語りの中では、ペットの存在感は多義的で可変的であった。このようなペットの存在感を、自分なりに解釈することを通じて、かれらは喪失体験のつらさを対自的に正当化しようとしている。そして、自己の内部に独自の死生観を構築することで、周囲の他者とのコミュニケーション不全を乗り越えようとする元飼主もいる。

本稿の分析では、「家族同様」といわれながらも、亡きペットの存在感が実際には状況によっても多様に変化し、時には「家族」とはかけはなれた解釈をされることで、その死を受け入れられるように準備されていることがわかった。そして、ペットの死は、その解釈においてさまざまな正当化がなされ、時に肯定さえされていることがわかった。

「家族同様」の解釈がこのように多様なものであることを考えると、ペットの場合に限らず人間の家族の場合にも、「家族」だからであるとはいいきれず、存在感がさまざまである可能性は大きい。したがって、そ

のような対象を亡くした喪失体験についても、遺族によって多様な解釈がされていると想像できる。「家族」の線引きが揺らぎ、主観的家族論といった議論が出てきていることも踏まえれば、遺族の生前の関係性について表面的な統柄による固定的な捉え方をすることは、必ずしもどのような状況でも好ましいとはいえないことが容易に想像できる。周囲の他者が遺族のつらさを理解し、何らかのケアを行っていく場合には、この点についての認識が不可欠であろう。

今後は、ペットの事例にとどまらず、さまざまな統柄の人間を亡くした事例について、さらに調査をすすめ、いろいろなケースがあることを提示し、決して対等とは限らない人間同士の関係性の十全な理解にむけて、周囲の他者の理解を深めていく素材を提供していくことを課題と考えている。

注

(1) 飼育動物、伴侶動物、愛玩動物などさまざまな呼称があるが、ここではわかりやすさを優先して、一般的な呼称を採用する。

(2) 元飼主が自分のつらさを理解してもらえない時、周囲との間に何が起きているのかをリアリティという見地から再考すると以下のようになる。日常世界の現実構成には、自己と他者との対面的出会いの場においてそれを用いて他者が理解されるさまざまな類型化的な図式がある (Berger & Luckmann [1966=1977: 52])。自己の類型化図式により、自己は他者についてのリアリティを把握する。ブルーマーはその「自己との相互作用」論において、人間が社会的相互作用過程においては単に他者と(自己―他者関係で)相互作用するだけでなく、同

時並行的に自分自身とも（自己—自己関係で）相互作用を行う点を特に強調している（Blumer [1969=1991]）。自己と他者との社会的相互作用過程において自己のリアリティが周囲に承認されている場合、自己—他者関係において違和感を感じることがないため、自己—自己関係での内的対話はさほど活発にはならないかもしれない。ところが、他者とリアリティがずれている等問題含みの状況では、自己内部での内的対話が活発化し、自己—自己関係における新たな解釈がなされるといふ。これをブルーマーは「自己との相互作用」(self-interaction) と呼び、丹念に検討している。つまり、自分にとってのペットの存在意義について、飼主はペットの死など、ペットに関わる何らかの問題状況に直面し、他者との何らかの違和感を有する場合、言語による何らかの把握を自己の内的会話に行っていることになる。これが、ペットに付与するリアリティであると定義した上で、以下論を進めてゆく。なお、ペットにはさまざまなリアリティが付与されているので、飼主の持つリアリティは周囲の人々に常に承認されるとは限らず、ずれ、分離の発生が前提できる。

(3) バーガーらの知見を受け継いだポルナーによれば、ある社会的事実について自己と他者とで経験するリアリティが異なっている場合には、人々の間に生じている「何が客観的現実」なのかについての食い違いが、何らかの事件をきっかけに顕在化することがある。これがリアリティ分離で、我々は食い違うリアリティを互いに疑い、当惑する（Pollner [1975=1987: 41-42]）。このようなリアリティがずれた状態は、日常的なルーティーンの相互作用が破綻した状況、自己と他者との関係において相互作用が立ち行かなくなっている状態である。

(4) ペットの平均寿命は、犬一・九歳、猫九・九歳、一二年前より犬が三・三歳、猫が四・八歳長生きである。ペットフードの普及やワクチン接種の普及が要因である。犬の場合、雑種が一三・三歳と長生きである（読売新聞二〇〇五年一月一二日付記事）。

参考文献

- Berger, Peter L., & Luckmann, Thomas 1966 *The Social Construction of Reality—A Treatise in Sociology in Knowledge*, New York: Doubleday & Company, Inc.=1977. 山口節郎訳。「日常世界の構成」新曜社。
- Blumer, Herbert George 1969 *Symbolic Interactionism*, Prentice Hall=1991. 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁章書房。
- 新島典子 「二〇〇一」 「ベットの喪失体験はなぜこんなにつらいのか—リアリティ分離・封殺とベット喪失者のつらさの強化について」『現代社会学論研究』第11号、二二五—二三八頁。
- 「二〇〇四 a」 「喪失 (Loss) からの「回復」にみる喪失対象の代替可能性」『ソシオロコス』第28号、四八—六二頁。
- 「二〇〇四 b」 「死別体験を生きること—死者の存在感と生者の死生観—」『死生学研究』二〇〇四年秋号、二二五—二四七頁。
- Pollner, M. 1975 "The Very Coinage of Your Brain": The Anatomy of Reality Disjuncture' in *The Philosophy of the Social Sciences*, 5, pp.411-430=1987. 山田・好井・山崎編訳。「エスノメソドロシー—社会学的思考の解体」せりか書房。

(にいじま・のりこ) 研究拠点形成特任研究員

Death and life view of the pet owners and the reality of pets' death: The meaning of death of "family-like" others

Noriko Nijjima

This paper examines how the reality of pets' death influences the death and life view of pet owners. In other words, it tries to understand the meaning of death of "family-like" others, in order to clarify a range of meanings included in a word, family.

It is not easy for the others to understand the difficulties experienced by the bereaved people and nor is it easy to help them out from the difficulties. By examining some cases of pet loss experiences the author collected, the meanings of death of "family-like" others are explained.

Many bereaved pet owners are found to justify their loss experiences by the concepts of "affection" and "dying a natural death". But, in a reality, these two concepts are individually understood in various way.

In the understandings of "affection" towards the pets, inequality between pets and their owners will be clearly indicated. The owners quoted in this paper used to take very good care of their beloved pet animals when they were alive. However, once the pets died, some of the pets' bodies, which were no longer warm or soft, even provoked owners' sense of fear. Some scared owner handled a dead body of his pet as a garbage.

Sometimes, the understandings of the concept "longevity" or "life expectancy" are even used to justify the discontinuing of medical procedures aimed at prolonging the dying pets' life.

In this kind of "contradictory" understandings having by the bereaved pet owners, we will find keys to understand the difficulties of the bereaved people who have lost their human family members well. Consequently, it is

not always suitable to understand the difficulties of the bereaved only from their outward kinship relationship with the deceased.